

東海林智著『15歳からの労働組合入門』毎日新聞社（2013年）

本書は、労働者の労働と生活の実態を取り上げたルポタージュである。タイトルには「労働組合入門」とあるが、冒頭で述べられているように労働組合の解説書や労働運動史ではない。労働者という「人」に焦点をあてたルポタージュであり、問題の本質を緻密に捉えながらも、読みやすく工夫されている。著者は労働問題を専門とする新聞記者であり、これまでも労働問題に関する新聞記事や著書を執筆している。また、労働組合の委員長や年越し派遣村のボランティア、さらには自らも過労による鬱状態を経験している。そうした経験を持つ著者が執筆した本書からは、「現代社会における労働組合の必要性」というメッセージを読み取ることができる。

安倍政権は経済成長戦略という名の下で、派遣労働の無期限化、限定正社員制の導入、解雇の金銭解決制度の導入などといった労働分野での規制緩和を推し進めようとしている。しかも、それを議論する場に労働者を代表する者はなく、主導するのも厚生労働省ではなく経済産業省である。著者は、労働政策を考える場に労働者を代表する者がいない状態を「八百長相撲」のようなものと強く批判している。また、ILO（国際労働機関）が労働立法は使用者、労働者、政府の三者による議論を推奨していることについて触れ、「国際的な潮流から見ても不公正」とであると強く批判している。もっとも、日本の労働現場では、雇い止め、退職の強要、長時間労働、過労死などの問題が後を絶たないのが実情である。一方、こうした問題に歯止めをかけようとする動きも起きている。本書のポイントは、そうした事例を労働者から丹念に聞き取り、その根底にある問題の本質を明らかにしているところにある。

スーパーマーケットでアルバイトとして働いていた大学生が団体交渉によって残業代の支払を確約したものの雇い止めに遭った事例、雇い止めされた派遣労働者が労働組合と出会うことで人となりが人間らしさを取り戻す事例、売店で働く非正規労働者達が正規労働者との差別待遇是正を求めてストライキを執行する事例、劣悪な労働環境の中で働き過労死した労働者の家族達が闘う事例などが紹介されている。そのなかでも、評者が衝撃を受けたのは、ダブルワークせざるを得ない高校生である。ある高校生は、勉学に励みながらダブルワークせざるを得ない生活を送り、大学進学後は勉学や就職活動に励みながらトリプルワークせざるを得ない生活を送っている。こうした問題が生まれる本質的な理由を探れば、それは本人や家族の責任ではない。本書を読めば、このことが雇用・労働、産業、教育、生活といった社会全体の問題であることが鳥瞰できる。また、本書のなかで随所に出てくる「普通に働きたい」「人間らしく働きたい」という言葉も衝撃的だった。勤労は国民の義務である。社会の一員として働く意欲があるにも関わらず、それが困難という状況をどのように打開すれば良いのだろうか。

本書に取り上げられている個々の事例は労働現場の暗い現実である。本書の最後に述べられているように労働に対する「テロというか破壊活動」とも捉えることもできよう。しかし、本書を読んでいると、暗い現実を打開しようと明るい希望を持ってがんばる労働者や労働組合の姿も見えてくる。それは、人間らしく普通に働き生活できる社会を取り戻そうとする労働運動の芽生えなのかもしれない。そうした中で、労働組合の必要性は高まるのかもしれない。（唐澤克樹）